

【感性を育てる読み聞かせ】

1 絵本で育つ子どもの心

絵本との絶妙な出会いは、読み手である保護者・教師と、聞き手である子どもの経験・個性などにより大きく左右される。

幼稚園などで集団の読み聞かせが成立する前段階として、それまでに個別的できめ細かい絵本体験が一人一人に成立していること。

(1) 集団での読み聞かせを成立させるためには (絵本を楽しむ力)

読み手(保育者)と聞き手(子ども)の間に人間的な触れ合いがしっかりとできていること。

子どもたちは言葉をしゃべる前に、身体・表情・ゼスチャーなどを通して自分を表現できているか。

子どもとつくる「絵本の読み合い」

子どもは(あるいは大人は)自分自身の感覚・身体を使って多様で直接的な経験を積んでいるか。

子どもは、まず、自分自身の身体を使って様々な遊びや経験をし、具体的な認識を積み重ねなければならない。そのような具体的な認識の世界が広がれば、それだけ多様な絵本の世界を楽しむことができるようになる。

映像メディアのテレビ・ビデオとの違い

- ・ 絵本は必ず読み手(大人)が介在するため、読むという行為の中に、きわめてきめ細やかで人間的なコミュニケーションが成立する。
- ・ 絵や表情を読み合い、心を読み合い、言葉を読み合う。
- ・ 子どもたちは、繰り返し繰り返し一冊の絵本を仲立ちにして、人間となることを学んでいる。
- ・ 絵本は、子どもたちの能動性を引き出してくれるメディアである。
- ・ 目に見えないが確実に存在する人間の心の深さについて考えさせてくれる。

(2) 集団での読み聞かせの問題点

絵本は基本的には1対1のじっくりした読み合いがもっともふさわしいメディアである。

多くの個人差のある子どもたちを引きつけるには、ダイナミックな筋運びと、主人公の性格が明瞭で物語の骨格がはっきりした昔話などは、集団の読み聞かせにはぴったりである。

幼稚園での絵本を収集するときは、少数派の好みをもつ子どもへの配慮する。

(3) 子どもたちの絵本の見方の特徴

3歳児	絵本の好き嫌いがはっきりでき始める。 自分自身の経験と直接に触れ合わない内容でも想像力の発達により理解できるようになる。
4歳児	一人読みはまだ文字が追えず、大人が読んでやるのが原則。
5歳児	集団でも黙って聞くことができるようになる。1冊の絵本の世界を互いに分け合って共有し、楽しむことができる。「赤ちゃん絵本」を自分の力で読みこなすことができる。
6歳児	絵本から得た知識や感動をすぐに表へ表さず、深く内面で受け止めることができる。

2 幼児の絵本の読みの構造

(1) 絵を読む

知っているものをたずね、自分の経験をしゃべりまくる。

(2) 読み手の表情を読む

自分の解釈を読み手の表情から探ろうとする。読み手の表情を確認する。

(3) 言葉を読む

分からない言葉をどんどんたずねる。

- (4) **読み手の心を読む**
背後にある深い物語の世界を、読み手の心の動きを通して真剣に読みとろうとする。
読み手の得意な分野や好きな絵本がよく伝わる。
- (5) **自分の中に発達を読む**
主人公と同じ境遇、主人公の心情に深く共感
自分の中に生じている様々な心理的状态の意味を冷静に判断できるようになる。
自分の発見を知らず知らずのうちにする。幼児の自己意識の発達とかなり深く結び付いている。

3 読み聞かせの意義

- (1) 「話し言葉」と「書き言葉」の世界を橋渡しするものとして、教師の読み聞かせは重要である。「生活の言語化」と「言語の生活化」を媒介する教師の役割は重要である。
- (2) 教師や友達と共に様々な絵本や物語、紙芝居などに親しむ中で、幼児は新たな世界に興味や関心を広げていく。
- (3) 様々なことを想像する楽しみと出会ったり、様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る機会ともなる。
- (4) 絵本や物語などの読み聞かせを通して、幼児と教師との心の交流が図られ、特別に親しみを感じる。
- (5) 一人一人が絵本や物語の世界に浸り込めるように、落ち着いた雰囲気をつくり出していくことが大切である。